伊藤整全集

第十七巻

伊藤整全集

17

新潮社版

編纂
瀬沼茂樹
平野　謙
小田切　進
奥野健男

小説の認識　他
定価二〇〇〇円
昭和四十八年七月十日　印刷
昭和四十八年七月十五日　発行
著者　伊藤整
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
東京都新宿区矢来町七一　電話
東京二六〇―一一一一　郵便番
号一六二　振替東京八〇八
印刷所　株式会社精興社
製本所　株式会社大進堂

伊藤整全集
―17―

© Sadako Itō
1973. Printed
in Japan.

乱丁，落丁本
はお取替えい
たします。

伊藤整全集 第17巻 目次

小説の認識

序　文　三
芸による認識　一三
現代文学の可能性　二三
中間小説の近代性　三一
本質移転論　三九
我が秩序の認識　五一
日本的人格美学　五九
芸の技術と倫理　七一
ジョイスとグリーンの場合　七七
諷刺の発想　九〇
近代日本人の発想の諸形式　九九
組織と人間　一三四

文芸読本

近代日本の作家の生活　一四
近代日本の作家の創作方法　一五九
論理と文学　一七一
療養者の歌と私小説　一七九
文芸のジャンルの現状　一八七
中庸は法で強制さるべきか？　一九五
「ユリシーズ」の成立　二〇三
作家における時代と個人　二一二
芸術と社会秩序　二二〇
文士になった理由　二二九
文士になった理由・続　二三六
技巧とは何か　二四四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

あとがき　二五二

評論（昭和27年～同31年）

〈昭和27年〉
文学と批評　二五四
文芸時評　二六一
『英吉利乙女』　二六六
『権力』　二六六
講和後の文学の本流　二六七
活躍した人々と作品　二六八
裁判についての感想　二七〇
憲法と武装　二七二
国民文学論について竹内好氏へ　二七四
グレアム・グリーンの小説論　二七七
『フロイド』　二七九
小説十戒　二八〇
『風土』　二八六
政治と文芸作家　二八六
短篇小説についての意見　二九三
戦後作家の社会観　二九八
裁判官の勇気とは何か　三〇二

〈昭和28年〉
文芸時評　三〇五
この作品集の成り立ち　三〇八
『ハインリヒ・ハイネ』　三〇九
日本一九五二年　三一〇
ペン・クラブというもの　三三三
著者小感　三三五

ジャアナリズムと人間　三三七
『詩と真実』同人諸氏へのアイサツ　三三九
小説の素人と玄人　三四一
岡野文相へ　三四三
作者の言葉　三四五
学生の三代　三四七
『経験としての芸術』　三五三
どんな人間像が可能か　三五四
「ライムライト」　三五八
昭和文学の死滅したものと生きているもの　三六〇
『チャタレイ夫人の恋人』裁判事件　三六六
公安調査庁　三七三
著者の思い出　三七四
『島村抱月』　三七七
ロオゼンバアグの死と正義　三七八
小説雑観　三八一
『若き姉妹よいかに生くべきか』　三八六
明治文学研究の人と書物　三八八
裁判官丹生さんへの反論　三九〇
わが著作と思索を語る　三九一
フロイドの『芸術論』　三九四
一九五三年の文学を考えて　三九五
教養主義の末路　三九七

〈昭和29年〉

芸術様式のこと　四〇三
作者の独白　四〇六
金達寿『玄海灘』について　四一〇
政党相互の利敵行為　四一一

ペン・クラブでの論議　四一三
遠藤勝一氏への手紙　四一七
大学の制度についての改革意見　四一八
非難甘受　四二〇
蒲池歓一の詩集　四二一
文芸時評　四二三
伊藤被告の意見　四二六
青春について　四二七
私の実験工場と製品　四三三
文芸時評　四三三
安定と変化　四四六
文章について　四五〇
文学とは何か　四五二
モダニズムの文学　四五七
文芸時評　四六三
文士と読者　四六七
小説と読者たち　四六八
講談本のスイセン文　四七一
『昭和の文学』　四七五
「生活演技説・修正」の修正　四七八
二つの政治形式　四八二
文学の第一章　四八五
漫画について　四八八
ゲーテ『若きウェルテルの悩み』〈きのうきょう〉から　四九一
保守党の恐怖感　五〇一
正義人道は国内用か　五〇二
極端から極端　五〇二
大学と入学者　五〇三
政治家と文士　五〇四
戦争はなくなる　五〇四
結核病床の数　五〇五

親父と息子　五〇六
進歩的と人間的　五〇六
ベスト・セラー　五〇七
「言葉が足りなかった」　五〇七
新聞の読みかた　五〇八
政略と善意　五〇九
国際詩学会議　五〇九
修身の恐怖　五一〇
論理の二問題　五一一
よい意見　五一一
「ダム・サイト」論争　五一二
国民生活の方向　五一三
芸術の必要　五一三
歌と俳句　五一四
歌と俳句再言　五一五
社会保障というもの　五一五

〈昭和30年〉

日本文学の考え方　五一六
『近代文学』と戦後の文壇　五一四
作家は養成し得るか　五一五
文壇論　五三二
芸術の中味は何か　五三七
評論家と読者　五三九
文学と学校教育　五四二
新潮・同人雑誌賞銓衡　五四四
社会的妥当性と芸術　五四四
匿名の功罪　五四六
書くことの実感と論理　五五〇
映画「ユリシーズ」と原作　五六七
全集を出すにあたって　五七〇
「ユリシーズ」　五七一

昭和前期の『新潮』　六〇三
常識と私　六一六
著者の言葉　六一七
文学界・新人賞小説選評　六一八
「ホオマア物語」について　六二〇
石原氏を推す　六二一
言論の自由と平和　六二三
言論統制に抵抗すべし　六二四
力不足　六二六
『婦人公論』の投稿小説　六二七
『現代史の中のひとり』　六二八
ジョイスのベスト・スリー　六三〇
戦争の危険　六三一
革命と幸福　六三三

〈昭和31年〉

わがブーム始末記　六三五
議会の傍聴　六四一
忘れ難い詩　六四三
『記念碑』　六四五
「地唄」　六四八
『万葉集の謎』　六四九
文芸批評のあり方　六四九
小説の面白さ　六五〇
「北の湖」その他　六五六
戦時中の作品について　六五七
小説の発想　六五九

*

編集後記　瀬沼茂樹　六六五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

伊藤整全集 第17巻（評論）

小説の認識

序文

この評論集に含まれている文学論は、一九四九年から一九五三年にわたって諸雑誌に発表されたものである。これ等の論文の内容は、私の前著『小説の方法』の発展として考えられ、かつ書かれたものであった。それ故これ等の論文の考え方の基礎は『小説の方法』にあり、その考え方を改めて反省することによって、私は次の段階を摸索した。従って、本書においては前著と同じ系統の問題が繰り返して取り上げられている。たとえば私小説の問題は、「現代文学の可能性」に扱われ、「日本的人格美学」を経て「近代日本人の発想の諸形式」に及んでいる。これは以前の私小説についての考察を自己流に発展させたものであって、『小説の方法』と密接につながっている。また「芸による認識」「本質移転論」「芸の技術と倫理」等は、『小説の方法』の中の「散文芸術の性格」の発展としての技術論であって、別系列をなしながら、前著よりは大きな場所を本書の中で占めている。また、前著の「西洋の方法」と関係のあるものとしては、「諷刺の発想」や「ジョイスとグリーンの場合」がある。更に社会と人間との関係を考えたものとして、本書には「我が秩序の認識」と「組織と人間」が加えられた。これは、前著で積極的に試みなかった分野に私が足を踏み入れたことになるが、その理由は、このような分野のことを考えずには私は現代の文学が考えられなくなったからである。

本書は河出書房の坂本一亀君と三年ほど前から出版の約束があったが、私は『小説の方法』でそうしたように、全部を今の自分の考で書き改めたいと思い、その暇を得られずに遅延していたのである。私は最近加筆する目的で通読して見た結果、それがほとんど不可能であると考えるようになった。私はいま多くの時間と労力とを割くことができぬ状態にあるが、それが主たる理由ではない。執筆が約四年半の長期にわたっているがため、私の考は少しずつ動揺し、変化し、そして自分流にではあるが発展して来ている。その推移の過程を抹殺すれば、これ等の論文の実質が失われるように思われて来たのが本当の原因である。私はその間の自分の考が移り進んだありさまを抹殺するに忍びなかったのである。

各論文は、それ故書かれた時の原型を保存し、ただその時の表現として、曖昧だと思われる細部に多少の訂正加筆をする程度にとどめておくこととした。この書物は

従って形の上では首尾一貫しない所があるが、この四五年間に私の考えた文学理論の中心的なものを集めたものとして、個人的に私は愛着を持っているものである。

言葉が生硬であったり、文壇的方言に偏したりしている所があると思うが、難解な点で当惑される読者は、『小説の方法』又は『文学入門』を併読して頂きたい。それが読者への我儘な願いである。

一九五五年三月

伊藤整

芸による認識

芸術とは、生命をそれの働きという実質でとらえるために人間が作り出した認識の手段ではないだろうか。この考は、色々な疑いとためらいを伴って明滅しながら、長いこと私の中に続いている。それは象徴派の詩の理論の中に、青春時代におぼろげに私が感じたものであり、分析と写実とに枝をひろげたほぼ同じ時期の散文のリアリズムをその後私が学んだ時に、一度は否定しかけた考であった。そして、そのリアリズムが疑われ、新しい心理学や民俗学や社会学の発生によって現実そのものが解体され、二十世紀の芸術が新しい理論の上に組み立てられなければならなくなった時、再び私の内部に甦ったものであった。しかし象徴派の詩の方法が確信を持たれたときに、実証的リアリズムの土台は失われていたのだと私は気がついていなければならなかったのであろう。それを世紀末とかデカダンという風に意識しなければならなかったところに、ヨーロッパの実証的な思想の危なさがあった、と気がつかなければなら

なかったのだ。そして、リアリズムへの不信がやむを得ないということは、同時に近代の市民社会の秩序が疑われることである。従ってその考え方は近代社会から本能的に拒まれたし、また詩人の側においても、自分を特殊な方法者として逃避させることによって、僅かに抵抗の灯を保ったのであろう。自己の意識の秩序を守るための本能による相互偵察と相互退避によって、実証的散文小説は市民道徳に対してその改革者としての立場を取り、マラルメは隠退し、ランボオは逃亡し、ヴェルレエヌは罪ある者となり、イエーツは緑の島の神秘主義者となり、メエテルリンクは感情の涸渇した隠者となって人に忘れられた。

実証的な近代の芸術、それは第一次大戦による市民意識の動揺とともに、腐った土台の上で、その巨大な構築の割れ目ができ、剝落し、崩壊しはじめた。ジョイスによって、ピカソによって、超現実主義者たちによって、カフカによって、またそれに続く多数の方法者たちによって、揺り動かされたのである。それはその崩壊においても巨大であり、悲劇的な壮観であった。崩壊において、それが如何に巨大な構築であったかを人々に認めさせた。それのイメージは再建することのできぬ神聖な近代のイメージとして現代人の網膜に残像した。そしてその崩壊のみがはじめて、世紀末のデカダンの詩人たちによって準備されていたものを、「不安」と「恐怖」という形で一般的通念たらしめた。その近代社会の安定したイメージは日本では大正の中頃に、ぼんやりと現われかかって消えたものだ。私たちにはヨーロッパの市民生活の典型がよく分らない。しかし宗教改革、産業革命、人民の政治革命、議会制度、大学、社交界、出版言論の権威、救貧院、慈善事業という風に幾重もの相当に厚い層をなして積み上げられた西ヨーロッパの近代社会が、その根元から動揺することを意識した「不安」は、ヨーロッパ人にとって、極めて大きく、怖るべきものとして感受されたにちがいない。それは第一次大戦後に一般化したとしても、もっと早く、芸術家たちによって、芸術の方法又芸術家の生活方法として感受されていたものにちがいない、と私は思う。

芸術家、詩人を予言者として考え扱うことと、このような考とは結びつけられるかも知れないが、それを私は好まない。詩人に予言者を見ることは感傷的な無知から来ていると思う。それは宗教と芸術とが混乱して考え合わされたものの変型である。それとは発生点を別にするもの、生命がその与えられている肉体を社会や民族の秩序の中に置きながら発する声として、存在する意識の純粋結晶の抽出のようなものとして、私は芸術を考えるのである。それが自然発生的なものであれば、それはその時の社会条件を多く含んでいるが故に真の純粋な生命の抽出にならず、その条件の変化とともに滅びるだろう。それが純粋な生命の結

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com